

シュメール語の代名詞接中辞の表記について

峯 正 志

1 はじめに

シュメール語文法の研究の際には様々な問題がある。文の「意味」と「形式」を結びつけるメカニズムが文法であるとする、文法の再構に当たっては対象となる文の「意味」および「形式」がはっきりと決まっていることが前提となる。

しかしシュメール語の場合にはこの前提が成立していないことが多々あるのである。まず一方では様々な要因で文の意味が取れないことがある。テキストの文脈が明らかでなく文意を決定できないこともあるが、そもそも基本的な単語の語義が全く不明なことも多くある。この場合は意味を推測したままで作業を進めなければならない。

他方これとは逆に、形式が正しく捉えられない問題もある。単語の読みがわかっていない場合がそれである。また、文脈や語義が明確な場合でも、シュメール楔形文字は多義・多音という特徴を持っているためその形式を決定することが出来ない場合があるのである。さらに問題なのは、単語の読みが分かったとしても正しい形式が決定できない場合もあるということである。それは形式が正確に捉えられたとして、それが本当に実際に話されていた(あるいは書記が意図していた)通りに表記されているのかどうかという問題である。

例えば線文字Bで表記されたギリシャ語の場合は、例え閉音節であるべき部分が開音節で表記されていても、それは表記上の問題であって実際には閉音節で発音されていたのであろうと解釈される。また日本語でも助詞の「は」「へ」「を」は書かれた通りには発音しない。それはギリシャ語がどんな言語であったか、また日本語ではどう発音されるかが予め分かっているからであって、シュメール語のようにもともと余りよく分かっていない言語の場合は、表記されたように話されていたのか、簡略化された表記であるのか、にわかに決めるわけにはいかないのである。

そのような表記の問題はシュメール語文法の様々な面に現れるが、よく取り上げられるのはシュメール語の定動詞に現れる代名詞接中辞の表記問題である。最近新しい資料に基づいた議論が出てきたので、本稿ではそれについて取り上げ、その議論の問題点を指摘したいと思う。

2 代名詞接中辞の表記について

2. 1 シュメール語の動詞連鎖

シュメール語の定動詞における代名詞接中辞の表記問題を説明するには、まず定動詞の形成法について述べなければならない。

シュメール語は名詞句要素の語順は自由だが、動詞は例外なく文末に位置する。動詞は、動詞語幹に様々な接頭辞が接辞され定同士を形成する。大まかにいうと次のような要素がこの順に接辞される。

- 1) 前接辞・・・モダリティ要素で、非義務的な要素である。
- 2) 活用接頭辞・・・義務的な要素だが機能不明。様々な説がある。
- 3) 「接中辞」・・・文中の名詞要素を承ける代名詞的な要素。非義務的な要素である。
- 4) 動詞語幹・・・未完了語幹、完了語幹の区別がある¹。
- 5) 人称接尾辞・・・主語の人称（および数）を表す要素。義務的な要素である。

「接中辞」とあるのは、動詞語幹の中に現れるという本来の意味の接中辞ではない。必須の要素である活用接頭辞と動詞語幹の間に現れる接頭辞のため、伝統的に「接中辞」と呼ばれてきた。最近では、接頭辞と呼ばれることが多いが、本稿では他の接頭辞と区別するため伝統的な「接中辞」を用いる。

2. 2 空間接中辞と代名詞接中辞

この接中辞は、意味的に二つに分類される。一つは文中の斜格名詞を受けて現れるものであり、これらの多くは名詞の格語尾と同じ形態を持つ²。もうひとつは文中の三人称の³主語または直接目的語を受けて現れるもので、人間名詞を受ける要素は-n-で現れ、非人間名詞を受ける要素は-b-であられる⁴。本稿で扱うのは後者の代名詞接中辞であるが、-b-はあまり頻繁には現れない要素であるため、-n-の表記が本稿で対象とする問題である。（以下ではこの要素を代名詞-n-と称する。

2. 3 代名詞-n-に関する問題点

この代名詞-n-に関する問題点はいくつかあるが、本稿で問題とするのは、代名詞-n-は果たして正確に表記されているのかどうかという点である。というのは、この要素が文中に書き表されていないとしてもそれは表記の都合で書き表されていない（つまり省略した）だけで、実はそこに存在するのだと主張する学者が多いからである。

例えば Hayes (1990)⁵は、” This particular prefix always occupies the position closest to the verbal root. However, this prefix frequently does not show up in the writing.” とし、表記上現れないことがあるけれども、この要素は義務的な要素であると断定している。そして更に、書かれぬ理由は正書法によるものか、そうでなければ音韻的なものかとしている。また Thomsen (1984)⁶も、” It seems most logical to assume that

the pronominal elements is always present, even if it is not written.”としている。これらの論では、断定的に書く割には具体的な根拠はあげない傾向がある。おそらく彼らは、シュメール語の属格語尾の表記の問題などが念頭にあるに違いない。属格語尾の場合、いくつも属格名詞が続く場合、いちいち正確に後続の属格名詞と同数の属格語尾が書き表されないことがよくあるからである。この代名詞-n-の場合も同様に考えているのだと思われる。

これに対し、これらは単なる表記上の問題ではなく、文法上の使い分けによって現れたり現れなかったりするのだとする研究もある。Yoshikawa(1991a)では、代名詞-n-が条件節や否定文に現れにくいことから動詞の表す行為の完了性に関わっているという議論がなされている。また Yoshikawa(1991b)では更に論を進め、「焦点 (focus) ⁷」という概念で説明しようとしている。

筆者も後者の立場に立つが、Rubio(1999)では前者の立場からの議論がなされている。そこで、Rubio(1999)の論を概略した後、その問題点について議論する。

3 Rubio(1999)の議論

この論文は、古バビロニア期に書かれたシュメール語の文学テキストと、その元になったと見られるウル第三王朝期に書かれた文学テキストの特徴を比較し、正書法および文法にどのような違いが見られるかを議論したものである。本稿ではこのうち、正書法に関する議論のみを取り上げる。

さて、ウル第三王朝期の文学テキストと古バビロニア期の文学テキストの違いを概観した後、Rubio(1999)はシュメール語の表記について次のようにまとめている。

「初期王朝期のメソポタミアでは、表記は表語文字を多用したため、多くの文法的要素は書かれないか、書かれても異形態を区別せず一つの形態で代用した。ウル第三王朝期になると音声的表記が次第に増え、語彙や形態素を音声的に明確に表そうとする試みが起きた。しかし、この試みはうまく行かず、古バビロニアの書記達は、音声的に正確な表記よりむしろ形態論的に正しい表記をするようになった。」⁸

そして、代名詞-n-については、次のような記述がある。

「おそらくウル第三王朝期の文学テキストでもっとも驚くべき特徴の一つは、接頭辞 ba-の後に現れるべき-n-が見られないことであろう。」⁹

そして、*Curse of Akkade*での動詞の形態が比較される。

ウル第三王朝期にはそれぞれ ba-ak, ba-da-ku⁵, ba-dub, ba-gar, ba-\$i-ak, ba-tum², bi²-RU, bi²-si³-si³ となっているものが、古バビロニア期では、ba-の後に代名詞-n-が現れ、それぞれ ba-an-ak, ba-da-an-ku⁵, ba-an-dub, ba-an-gar, ba-\$i-in-ak, ba-an-tum², bi²-in-ra, bi²-in-si³-si³ となっている¹⁰。

しかしながら、これには例外もあり、ウル第三王朝期と古バビロニア期で逆の傾向を見

せるテキストも存在するようである。また、ウル第三王朝期より多少古い(同時期という説もある)文学テキストである Gudea 碑文では接頭辞 ba-の後に代名詞-n-を伴った例が多く存在する。しかし一般的な上記の傾向は変わらない。

そして、このような記述が続いた後、代名詞-n-について、

The question of the presence or lack of preradical -n- may be just a phenomenon of the writing interface. ¹¹

と書かれ、類型論的には、次に音が続く位置の鼻音は書き表されないことが普通であるという記述が続くのである。

彼にとっては要素が正確に記述されるべきウル第三王朝期に代名詞-n-が現れにくいという現象は理解しにくいことであつたに違いない。そこで音声的な理由を持ち出してきたのであろう。いずれにしてもここには、代名詞-n-があるはずなのだが表記(あるいは音声上)の問題で現れていないだけだという見解が見られるのである。

ただし、最初に述べた彼の初期王朝期から古メソポタミア期までの表記法の変遷を頭に入れて好意的に見ると、ウル第三王朝期において文法要素などをより正確に表そうとする試みが生じたとするのであるから、従来は存在するにもかかわらず書き表されていなかった要素が次第に書き表される過渡的な段階にあつたから、このような現象を見せているのだと解釈することも可能であろう。しかし、この表記法の変遷についても次章で問題点を指摘する。

4 問題点の考察

まず最初に、Rubio(1999)はウル第三王朝期には正確に書こうとする傾向があつたとしているのに、代名詞-n-は実際には書かれていないことが多いという事実は、代名詞-n-が存在するという事実と矛盾する。正確に書かれているのなら、書かれていない場合には存在せず、書かれている場合に存在すると解釈するのが妥当だろう。

こう解釈するにはいくつか根拠がある。まずある要素の出現状況が自由変異でなく、ある一定の条件の下に条件付けられていることが分かれば、その要素が常に現れているという予測を否定することになる。

これにはまず前述の Yoshikawa(1991a)を見るとよい。この研究では、代名詞-n-が条件節¹²や否定文に現れにくいという傾向を多くの例を挙げて明らかにしている。この研究は、この指摘に留まらず、さらに特定の接頭辞が用いられる場合には例外も存在することを示している。例外が特定の接頭辞で現れるということは重要である。文法的に条件付けられている可能性を示唆するからである。これらのすべてを音声的または表記的理由で説明できるのだろうか。

また同様な例として、古バビロニア期の経済文書における代名詞-n-の出現状況も挙げられる¹³。峯(2002)で明らかになったように、イシン・ラルサ期の経済文書に見られる動詞

は、代名詞-n-が現れるかどうかは、動詞によって異なっている。例を挙げると¹⁴,

- 1) 何もとらないもの (ba-V) は, la2, zi
- 2) -n-をとるもの (ba-an-V) は, gar, ku4, \$u~ti
- 3) -b-をとるもの (ba-ab-V) は, dul4, tag
- 4) -a-をとるもの (ba-a-V) は, si,
- 5) -ra-をとるもの (ba-ra-V) は, KE\$DA

のようになる。

ここで重要なのは、同じ動詞であっても意味的にやや異なるコンテキストに用いられる場合は異なる接頭辞をとるということである。例えば、(2)に分類される gar は ba-an-が用いられるが、a-KA-a~gar「会計に入れる」という意味で用いられる場合は、この動詞は ba-a-gar となり、*ba-an-gar は決して認められない¹⁵。代名詞要素である以上、代名詞-n-はどちらの文脈でも同じように現れなければならないはずだが、そうはなっていない。つまり、文法的に正確に書き分けられているわけであり、正書法的なものであるということの反証となる。

また、同じ動詞で同じ文脈なら全く同じ接頭辞が現れるわけではなく、少数ではあるが例外が存在することも重要である。もしそれらが正書法的なものであれば、全く同様に現れなければならないが、現実にはそうなっていない。

このように、代名詞-n-の場合は、出現状況にある傾向が見られるが、これは前述した属格語尾の場合とは全く異なるのである。属格語尾の場合は未だに出現条件に一定の傾向を指摘した人はおらず、今のところは自由変異と解釈せざるを得ない。このようなものと代名詞-n-を同様に扱うことは出来ない。

次に、表記法による違いと主張する人たちは、接中辞のうち代名詞-n-だけが書記法の問題だと言っていることも問題である。実は空間接中辞も代名詞-n-と同じように、現れたり現れなかったりするのだが、不思議なことに、これについては特に表記上の問題とは主張しない。それなのに代名詞-n-に関しては、表記上の問題だと述べるのである。もし本当に書記法上の問題なら、空間接中辞の方もそのように主張しないと首尾一貫しないのではないか。

筆者は峯(1992)で、日付表現の簡略化の現象について述べた。これは日付表現に ba-ta-zal という表現があるが、その中の空間接中辞-ta-がアマルシンの治世以降、書かれなくなるという現象を指摘したものである¹⁶。彼らはこれについてどう考えるのであろうか。存在するはずのものが書かれなくなってきたと主張するのであろうか。空間接中辞と代名詞-n-が違うのであればそれについての言及もしなければならないのではないか。

日付表現をさらに例に出すと、この ba-ta-zal という表現に用いられている空間接中辞-ta-は-ra-と表記されることがある。これは出現傾向が把握されておらず自由変異の可能性が高いが、音声的に見て母音間の無声閉鎖音が有声化を経て流音になったものと考えら

れる。このような小さな音声の違いも表記に表そうとしていた書記達が、存在する要素を書き記さなかったということが有りうるだろうか。

このように、ウル第三王朝期の文書はかなり正確に表記されているように思われる。そう考えれば、書かれているはずのものがあると考えより、素直にその要素がなかったと考える方が妥当なのではないだろうか。

さて、ウル第三王朝期には正確に書こうとする傾向があるのは事実だが、実は Rubio(1999)が述べているように、ウル第三王朝期だけに見られる特徴ではないと筆者は考えている。そのような傾向はシュメール語の初期王朝期から見られることである。非常に初期の段階を除けば、初期王朝期からのシュメール語はほぼ完璧に文法要素を書くことに成功していると考えられる。すくなくともそのような試みはあった。そのことを次の2点を根拠に述べてみたい。

一つめは、初期王朝期のラガシュで見られた母音調和のような現象である¹⁷。これは正確には母音調和現象とは捉えられないが、母音同化現象であることは確かである。

Rubio(1999)は、異形態も同じ形態で書かれたとしているが、このような例もあることは、シュメール人たちがかなり正確に音声表記を試みていたことを示している。これに関しても、南部方言のみでこの現象が見られたのか、それとも他の地方にも同様の現象があったにもかかわらず、表記上同じ要素で書かれたのかどうかという問題は残る。

Rubio(1999)は他の地方でもこの区別があったという前提に基づいて正確な表記ではなかったとしているのであろう。

もう一つは与格の-ra-が定動詞中に-ni-という空間接中辞で繰り返されることである。他の格の場合は、どのような場合に定動詞中に接中辞として再び現れるのか、その条件が捉えにくい。与格に関してのみは、ほぼすべての場合に対応する空間接中辞-ni-が現れる。他の格の空間接中辞の場合も本当は存在するはずなのに書かれていないのだとすると、どうして与格のみ常に書かれているのか説明に窮する。このような場合はやはり「無いから書かれていない」のだと素直に受け止めるべきであろう。

このように初期王朝期に於いても、書記達は正確に書こうと努めていたことが分かる。

Rubio(1999)が、初期王朝期の文書が正確に表記されていなかったとする例として挙げているのは、enclitic copulaである *men* や *me\$* が単に *me* としか表記されていなかったことである。しかしこれは表記の不正確さと捉えるより、簡略化と捉えるべきであろう。簡略化とはそれがなくても伝達に支障がないことが前提である。*me\$* や *men* を *me* であらわしたとしても、enclitic copula には *me* という語形が存在しないため *me* と混同されることはありえない。しかし代名詞-n-については、それが現れるか現れないかで意味やニュアンスの違いが生じる可能性がある。代名詞-n-の場合は簡略化とは異なるのである。

5 おわりに

上で述べてきたように、シュメール人はウル第三王朝期だけでなく初期王朝期においても、シュメール語をかなり正確に表記していた。少なくともそのように努めていた。従って書き間違いでない限り、表記されていたように発話していたと考えるべきであり、それに基づいて文法の再構に望まなければならないと思う。代名詞-n-の表記についても同様であり、その前提の上で統語的機能の分析を行わなければならない。

注

- 1) 完了語幹が無標で未完了語幹が有標である。未完了語幹には1) 語根を変えるもの、2) 語根を重複させるもの、3) 接尾辞をとるもの、の三種類ある。
- 2) 例外は与格の -na- (与格語尾は -ar または -ra), 所格の -ni- (所格語尾は -a)。ただし所格に関しては、後に類推現象で格語尾と同じ形の接中辞が生じたとする説がある。吉川 (1983) 参照。また格語尾でも、様格 (equative) の -gin7 は対応する接中辞が在証されない。
- 3) 一人称および二人称の代名詞接中辞もあるが、在証される例が非常に少ない。
- 4) シュメール語では、名詞に人クラス・物クラスの区別がある。Preradical・n- が n- で現れるか -b- で現れるかは、このクラスの違いを反映する文法的現象の一つである。
- 5) 同書 p. 36. なお, Hayes は infix でなく prefix を用いている。
- 6) 同書 p. 218.
- 7) 言語学でよく用いられる「(情報の) 焦点」とは異なる概念である。
- 8) Rubio (1999) p. 25. ここでの訳文は意識である。
- 9) ibid. p. 41ff. ここでの訳文は原文に忠実な訳である。
- 10) もちろんこれらはあくまで傾向であって、例外なくこのような分布を示すわけではない。
- 11) ibid. p. 44.
- 12) 条件節の例としては、tukumbi (もし~ならば) 節, u3- (~後で, ~したら) 節が挙げられている。
- 13) Rubio (1999) でも多少言及されているが、そこでは動詞 \$u~ti のみしか言及されていない。峯 (2002) は Crawford (1954) および Van de Mieroop (1987) の全動詞を対象にしている。
- 14) \$は [sh] の音を表す。
- 15) 吉川 (1983) p. 429 参照。
- 16) この現象は、他の同趣旨の変化から考えて、簡素化の例と捉えてよいと思われる。しかしあくまで書かれていないのは「存在するもの」をわざと書かなかったのではなく、それが現れない語形を使用したものと捉えなければならない。
- 17) Thomsen (1984), p. 163, § 309 参照。

参考文献

- Crawford, V. E. (1954) *Sumerian Economic Texts from the First Dynasty of Isin*. Babylonian Inscriptions in the Collection of James B. Nies, Yale University Vol. IX, Yale University Press. New Haven. (=BIN IX)
- Hayes, L. J. (1990). *A Manual of Sumerian Grammar and Texts*, Udena Publications

峯正志 (1992) : 「URIII 期の行政経済文書における日付表現の書式変化について」, 『ニダバ』 第 21 号, 49-56

_____ (2002) : 「イシン・ラルサ期の行政経済文書におけるシュメール語の接頭辞 ba- と preradical -n-」, 『古浦敏生先生御退官記念言語学論集』, 465-478

Rubio, G. (1999). Orthography and Grammar of the Ur III Sumerian Literary Texts, 発表資料 : 第 6 回 Sumerian Grammar Discussion Group 会議

Thomsen, M. -L. (1984). *The Sumerian Language*, Akademisk Forlag.

Van de Mieroop, M. (1987) *Sumerian Administrative Documents from the Reigns of Isbi-Erra and Su-Ilisu*. Babylonian Inscriptions in the Collection of James B. Nies, Yale University Vol. IX, Yale University Press. New Haven. (=BIN X)

吉川守 (1983) : 「シュメール語における類推変化-シュメール語の死語化の時期に関連して-」 『言語学論叢-関本至先生古希記念論文集』, 425-439

Yoshikawa, M. (1991a). Ergativity and Temporal Indication in Sumerian, *Near Eastern Studies Dedicated to H. I. H. Prince Takahito Mikasa on the Occasion of His Seventy-Fifth Birthday*, pp. 491-504

_____ (1991b). Focalization in Sumerian Verbs, *Acta Sumerologica*, 13, pp. 389-407